



中高生とともに差別と闘う

『人権作文『本音で話す』』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



人権作文「本音で話す」

この二度にわたる合同人権学習をもとに、ミナコはさらに自分自身を見つめなおします。ミナコがまだ言えていなかった、部落との関わり。そのことにしつかりと向き合った人権作文を、後日ミナコは書いてきました。

人権作文「本音で話す」

「本音で話す」

先生は、いつもそのことについて話してくれました。でも、今まで私は、どうして他の人に自分の辛さや苦しみを話さなければいけないのだろうと思っていました。自分の本当の姿を見せても、わかってもらえない、嫌われてしまうのではないかと思っていたからです。だから、友達が話し合いの時に、自分のことを話しているのを聞いた時、どうして自分のことをそう簡単に言ってしまうのだろうか、とてもびつくりしました。

ところが話を聞いてみると、みんなの知らないところが見えてきて、友達の悩んでいることや悲しかったこと、うれしかったことなど、友達のことを知れば知るほど近づけたみたいでうれしかったのです。ああ、こういうことなんだと、私は思いました。先生が言っていた「本音で話す」ということはこういうことなんだ、と。私も、私のことを知ってもらいたいと思うようになりました。

私の両親は離婚しています。三

人きょうだいで、私は父の方で、弟たちは母の方で暮らしています。今は毎日楽しく過ごせていますが、小学六年生の時は学校に行くのが辛くて、保健室登校という日が半年も続きました。ミニバスケットの練習もろくにできませんでした。毎日泣いて、周りの人を困らせた。自分のことも責めました。でも、これでは自分がダメになると思い、少しずつ学校に行くようになりました。

私のことを知ってもらうには、このことを絶対に話さなければならぬと思っていました。とは言っても、人前で自分のことを話すということはとても勇気のいることです。私は、これまで自分の苦しかった思い出を話したことはありませんでした。やっぱり人の目が気になるし、私の時にかぎって聞いてくれなくなるんじゃないかと思うと、とても恐かったです。だから、なかなか言えませんでした。本当に話さなければいけないのだろうか、私の話を聞いてわかってくれるだろうか、ビクビクしていました。

そうやって悩んでいる時、一人の友達が自分の親のことを泣きながら話してくれました。自分の辛いことを話してくれた友達に、私は突き動かされました。こんなにがんばって発表してくれた友達の思いに、今度がんばって自分が返していかなくては、返したいと思いました。

発表の場には他の学年もいて、私

はやっぱり恐くなり、発表をやめようかなと思いました。でも、ここで言っておかないと絶対後悔すると思いい、勇気を振り絞って言いました。とても緊張して声が震えました。何をどういうふうにか考えていたのに、頭が真っ白になって、言いたかったことの半分も言えませんでした。でも、みんなは、私の話をよく聞いてくれました。私が涙でまっけて話せなかった時も、「がんばれ」と励ましてくれました。そして、学校に行けなくなつてみんなに迷惑をかけたことも、許してくれました。

私はとてもうれしかった。私の周りには、こんなに私のことをわかってくれる人がいるんだと思うと、涙が止まりませんでした。どうして今まで一人で悩んでいたのだろうか、ビクビクしていた自分が小さく思えました。

数日後、先生が、「これ、この前に発表したときのみんなの感想」と言つて、五枚のプリントをくれました。私は、それを読んでもう一度泣きました。私のことをちゃんと受けとめてくれていたんだと、改めて実感しました。私の発表を聞いた一年生の子からも、「私もお父さんとお母さん離婚してるの」と、自分から話しかけてくれました。

こうやって自分のことを何でも話せて、それにちゃんと応えてくれる人がいる、これが本当の仲間なのかなと思います。こういう仲間がいる私は、とても幸せ者だと思います。

実は、私の両親が結婚する時、母が部落出身ということで、私の祖母は結婚を反対していたそうです。それを聞いた時、私はショックでした。まさか、私の祖母に限つてと思いませんでした。だから私は、祖母と部落について話すということがずっとできませんでした。どんな言葉が返ってくるのだろうか、とても恐かったからです。

友達の発表を聞いた日も、家に帰る途中、どう言おうか悩んでいました。でも、今日言わないと、言えない気がしました。こんなに勇気を出して話してくれた友達がいるのに、私も勇気を出さないとと思いました。家に帰ってもなかなか話し出せませんでした。そしてピアノの帰り、思い切つて聞いてみました。「おばあちゃん、部落についてどう思ってる？」

「別に何とも思っていないよ」
「でも母さんと父さんの結婚、反対したんじゃない？」

「あれは時代が時代だったし、まだひいおばあちゃんもいたし…。でもみんな平等に生活してるし、みんな同じ人間なんだから、ばあさんは別に何とも思っていないよ。他の人は何か言ってるかもしれないけど、ばあさんは言わないようにしてる。お母さんとお父さんが別れた時も、ばあさんのせいだって言われたこともあったけど、気にしないようにしてる」

(次号に続く)